



TITLE:

静脩 Vol. 4 No. 5 (1968.1) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 4 No. 5 (1968.1) [全文]. 静脩 1968, 4(5)

ISSUE DATE:

1968-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65922>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1968年 1月

Vol. 4, No. 5

情 報 の 複 写

芦 田 讓 治

わたしが大学院学生であった頃——といえは30年以上前のこと——手元に残しておきたい文献の図表などがあると、手札型のカメラのピントグラスを虫眼鏡でのぞきこんでから、カメラが動かないよう注意しながらフィルムパックに差しかえて、シャッターを切ったものである。それが、ライカの接写装置になり、リコピーになり、さらにゼロックスができて、楽に複写ができるようになった。

ゼロックスを操作しているとき、光源がページをなでてゆくのをながめていると、このような速さで論文が読めたら有難いのだが、と思うことがある。また、ゼロックスに写すと、自分のものになってしまった気がして、“つんどく”になりがちである。情報を紙から紙へ転写するのは楽になったのだが、紙から大脳組織への転写は、むかしのままである。

われわれが親からうけついだ遺伝情報は、われわれのしらない間に、からだの中でさかんに複写されている。からだが生長期にあって、細胞が増殖するときはもちろんであるが、成人になってからでも、たとえば精子が作られるときなど、情報担体であるデオキシリボ核酸の複製が、正確に作られ続ける。またその遺伝情報をリボ核酸に転写し、さらにそれを蛋白質に翻訳して具体化するという作業は、われわれのからだじゅうで、たえず進行している。しかしこういう、親から遺伝された情報でなく、後天的に得た情報は、その人の脳のどこかにたくわえられるだけで、子供に伝えるというわけにはいかない。こういう情報は、人間は、ことば、文字、あるいはテープにのせた記号というような体外の手段を使って、伝えることができる。それも、自分の子供だけでなく、誰にでも、また距離と時間の制限なく、伝えることができるし、情報の複製も、印刷その他主として物理的な方法で、容易にできる。

ところが近頃、生化学的方法によって情報を伝える可能性を示唆する実験結果が報じられるようになった。たとえば、プラナリア（極めて下等な虫）に、ある条件反射をつけてから、そのからだの核酸を抽出して、それを、条件反射をつけていないプラナリアに食わせると、条件反射が伝わるというのである。その後、これに似た現象が、ネズミや金魚などでも見られたという報告が出て、物議をかもしている。論文や書物に含まれる情報は、条件反射よりもはるかに複雑だから、条件反射が核酸を使って伝え得るとしても、物識り先生の脳天を割らしてもらって、その核酸が何かをとりだして注射してみても、試験勉強をしないです

むというわけには、いきにくいだろう。しかしもし、そういうことができるようにでもなれば、そして、所定の情報をもつ核酸を、テープの指令か何かによって試験管内で合成できるようにでもなれば、図書館の文献複写室は、生化学的合成室となり、“閲覧室”は、情報物質を注射してもらおうという実利派のひしめく部屋と、読書のだいご味にひたろうという静修派のための快適な部屋とに分かれることであろう。——いやはや、過ぎた屠蘇がだいぶまわってしまったようである。

(理学部長)

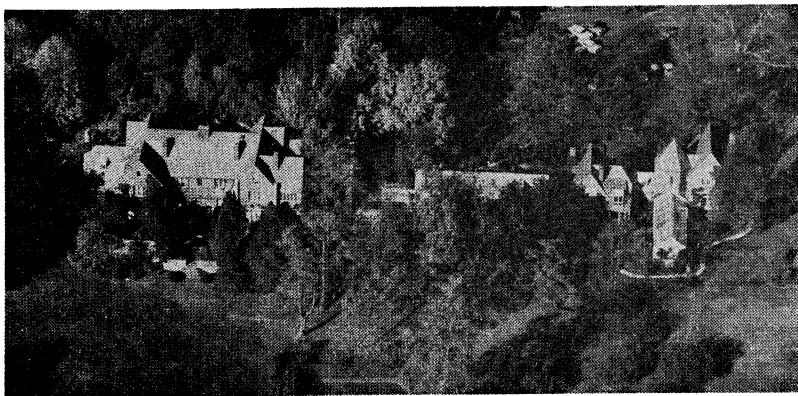
諸外国の研究所図書室(I)

占 部 実

私はここ10年ばかりの間に、欧米の研究所に勤務したり、共産圏諸国の研究所を訪問したりしたので、ここにこれら研究所の図書室の模様を思い出しながら述べてみようと思う。

私の専門は応用数学なので、話も自然その方面のことに限られてしまうが、この点は予めご了承ください。

私が最初に勤務したのは、米国の Baltimore にある Martin という航空機製作会社の研究所で、Research Institute for Advanced Study, 略して RIAS と呼ばれている研究所であった。この研究所は1955年会社の基礎研究所として創設され、数学部門は1958年 S. Lefschetz の尽力によってつくられた。私が勤務したのは1959～1960年であるが、数学部門では主として非線形振動、自動制御の理論的研究が行なわれていて、S. Lefschetz の指導の下に、専任所員の J. LaSalle, R. Kalman, J. Hale などが中心となって活躍していた。数学部門では所員は全部で30名位であったが、半数が専任で半数は客員所員であった。建物は Baltimore 郊外の個人の家を買収したもので、到るところにバスルームがあったり、広い庭園があったりして、全くアトホームな雰囲気をもっていた。私が勤務していた当時は、アメリカでも冷房設備はまだそれほど多くなかったのだが、研究所だけは各室とも冷房装置がついていたので、ときどき来る Johns Hopkins 大学の連中は研究所を非常に羨ましがっていた。



研究所の図書室は可成りの蔵書をもっており、とくに雑誌類はよく整っていた。数学部門は新設されて間がないのに、バックナンバーもよく揃って

いた。感心したのは、図書室がつねに整理されていることであった。わが国の図書室では未整理の図書が書庫の隅にうず高く積んであるのをよく見掛けるのだが、このようなことはここでは一度も見たことはなかった。図書室には専門の司書のもとに、数人の職員がいただけであるが、多忙なときにはパートタイムの人を雇ってでも早々と片付けていたようである。しかし職員個人個人の仕事の要領も日本とは相当に違うように見受けられた。

図書室のサービスでとくに感心したことは、他の図書館との連絡が実によくとれていることであった。研究所の図書室にない文献を見たいときには、この旨申出ると、図書室から他の図書館に連絡して数日のうちにその文献を届けてくれ、また複写したものが欲しいときにはその旨申出れば、複写したコピーを直ぐ届けてくれた。ゼロックスはまだできていなかったなのでコピーにはいろんなものがあったが、ともかくこうしたことによって、研究所が自分で図書を網羅的に集める必要はなく、図書に関する限り、限られた予算、限られた建物でも研究に支障は来さないようになっていた。図書館相互の連絡を緊密にして相互に融通し合うことは、出版物の急増している現在、わが国でも最も重要なことではないだろうか。

つぎに私が勤務したのは、米国の Madison にある Wisconsin 大学 付置の研究所で、Mathematics Research Center, 略して MRC と呼ばれている研究所であった。この研究所は R. Langer の尽力によって創設されたもので、応用数学の研究を主としている研究所である。所員は全体で40~50名位であったが、専任所員はごく少数で、大部分は1年契約の客員所員であった。私はここに、1960年と1963~1964年と2回にわたって勤務した。最近の研究テーマを年毎に定め、そのテーマを中心にして客員所員を集めているようである。研究所は大学構内にあり、建物は数学教室、物理学教室とつながっていて、図書室は数学教室、物理学教室と共用になっていた。この図書室の蔵書数やその内容はわが国のそれと大した変りはなかった。

話が脱線するが、ここで Wisconsin 大学の中央図書館のことを少し述べておこう。中央図書館は莫大な蔵書をもっており、全学的なものはすべてここに保管されている。中央図書館には世界各国の主な新聞がすべてとってあったので、私は新聞を読みによくこの図書館に通った。世界各国の新聞を比較すると、日本の新聞では記事の扱いが一方的であったり、また書いた記事に対して無責任であったりするのが目立ち、どうも日本のジャーナリズムは病気がかかっているのではないかと思うことがよくあった。中央図書館は全館冷暖房になっているので、友人の工学部教授は答案の採点をしに図書館によく行っていた（教室の方は冷房施設がしてない）。とにかく中央図書館は大学の中では、きわめて気持のよいところであった。

欲しい文献が、大学内のどこの図書室にあるかを知りたいときは、近くの数学の図書室に行けばすぐ教えてくれるが、この間の事情はわが国のそれとほとんど変りはなかった。ただ大学内にないものについては、研究所のセクレタリーが中央図書館に連絡してくれ、他の図書館からすぐとり寄せてくれるので、非常に便利であった。

RIAS でも MRC でも所員の研究成果は Technical Reports として印刷され、関係方面に配布されている。しかしこの Technical Reports のタイプ、印刷、配布はすべて研究所のセクレタリーの仕事で、図書室は残ったものをただ保管しているだけであった。（つづく）

（数理解析研究所教授）

○ 教 官 文 庫

☆昭和42年11月より本号発行までに、御寄贈のあった教官文庫の新着書を紹介します。

(到着順)

- 「日本中世住宅の研究」 川上 貢（工学部教授）著 墨水書房 昭42刊 368p.
 「恥の文化再考」 作田啓一（教養部教授）著 筑摩書房 昭42刊 282p.
 「統計学的手法による自動制御理論」 榎木義一（工学部教授），砂原善文（工学部助教授）共著 オーム社 昭42刊 345p.
 「技術者のための統計的方法」 近藤良夫（工学部教授），舟阪 渡（工学部教授）共編 共立出版 昭42刊 658p.
 「現代労働法の理論」 片岡 昇（法学部教授）著 日本評論社 昭42刊 238p.
 「世界の中の日本百年」 会田雄次（人文科学研究所教授）編著 文芸春秋 昭42 258p.
 「社会人のための応用経済学」 馬場正雄（経済学部教授），宮崎 勇共編 日本経済新聞社 昭42刊 316p.
 「素粒子」 町田 茂（理学部教授）著 中央公論社 昭42刊 178p.
 「下剋上の文学」 佐竹昭広（文学部助教授）著 筑摩書房 昭42刊 263p.
 「言語学史」 トムセン著 泉井久之助（文学部教授），高谷信一 共訳 清水弘文堂書房 昭42刊 200p.
 「自由と法則と医学」（前川孫二郎教授研究業績集） 前川孫二郎（名誉教授・医）著 前川教授退官記念刊行事業会編 昭42刊 764p.

○ プリンストン大学出版部第5回寄託図書目録（詳細は本館参考掛まで）

（人文科学関係）

- Aarsleff, H.: The study of language in England, 1780-1860. 1967.
 Buttel, R.: Wallace Stevens. 1967.
 Cox, J. M.: Mark Twain. 1966.
 Eigner, E. M.: Robert Louis Stevenson and Romantic tradition. 1966.
 Epstein, K.: The genesis of German conservatism. 1966.
 Feis, H.: The atomic bomb and the end of World War II. 1966.
 Furley, D. J.: Two studies in the Greek atomist. 1967.
 Gillin, D. G.: Warlord. 1967.
 Lidtke, V. L.: The outlawed party. 1966.
 Meyer, B. C.: Joseph Conrad. 1967.
 Mraz, G. P.: Eugène Delacroix's theory of art. 1966.
 Suh, D.: The Korean communist movement, 1918-1948. 1967.
 Turner, A. R.: The vision of landscape in Renaissance Italy. 1966.
 Weigand, H. J., ed.: Surveys and soundings in European literature. 1966.

（社会科学関係）

- Ashford, D. E.: National development and local reform. 1967.
 Fellner, W. & others: Maintaining and restoring balance in international payments. 1966.
 Juergens, G.: Joseph Pulitzer and the New York world. 1966.
 Malkiel, B. G.: The term structure of interest rates. 1966.
 Patterson, G.: Discrimination in international trade, the policy issues 1945-1965. 1966.
 Rammelkamp, J. S.: Pulitzer's postdispatch 1878-1883. 1967.
 St. Erlich, V.: Family in transition. 1966.
 Smith, D. E., ed.: South Asian politics and religion. 1966.
 （自然科学関係）
 Bing, R. H. & Bean, R. J., ed.: Topology seminar Wisconsin, 1965. 1967.
 Bonner, J. T.: The cellular slime molds. 1967.
 Elsasser, W. M.: Atom and organism. 1966.
 Johnson, F. H. & Haneda, Y., ed.: Bioluminescence in progress. 1966.
 Kunstadter, P., ed.: Southeast Asian tribes, minority, and nations. v. 1, 2. 1967.

昭和41年度 京都大学増加図書統計 (昭和42年3月現在)

計別 部局別	種別	増加冊数			累計		
		和漢書	洋書	合計	和漢書	洋書	合計
図書館		3,250	654	3,904	282,822	132,296	415,118
法学部		3,058	3,174	6,232	136,091	191,578	327,669
医学部		487	944	1,431	22,868	62,314	45,182
病院		215	312	527	8,074	19,019	27,093
工学部		2,550	7,478	10,028	62,378	106,477	168,855
文学部		5,059	5,281	10,340	314,549	166,959	481,508
理学部		849	4,601	5,450	23,710	116,887	140,597
経済学部		2,927	3,228	6,155	110,034	127,389	237,423
農学部		4,153	2,603	6,756	95,358	93,823	189,181
教育学部		2,087	1,580	3,667	15,228	18,186	33,414
薬学部		356	277	633	4,948	5,768	10,716
教養部		4,424	5,189	9,613	108,654	71,751	180,405
化学研究所		395	1,000	1,395	4,105	10,803	14,908
人文科学研究所		36,190	1,809	37,999	144,217	19,846	164,063
結核研究所		27	7	34	795	999	1,794
工学研究所		146	399	545	1,787	2,827	4,614
木材研究所		132	193	325	2,514	1,455	3,969
食糧科学研究所		174	220	394	1,530	1,775	3,305
防災研究所		328	543	871	2,590	2,841	5,431
基礎物理学研究所		63	1,201	1,264	1,129	9,894	11,023
ウイルス研究所		8	77	85	107	419	526
経理部		61	255	316	3,363	107	4,073
施設部					727	50	777
演習林		138	40	178	3,065	1,653	4,718
農場		1	1	2	948	93	1,041
工業教員養成所		669	309	978	5,880	1,058	6,938
経済研究所		2,945	1,415	4,360	7,610	3,830	11,440
数理解析研究所		126	3,108	3,234	619	9,546	10,165
原子炉実験所		737	1,441	2,178	2,407	4,500	6,907
合計		71,555	47,339	118,894	1,368,107	1,184,746	2,552,853
		和漢書	洋書	合計			
金額		63,512,309	210,458,989	273,971,298	円		

○ ダンテ関係集書の寄贈を受く

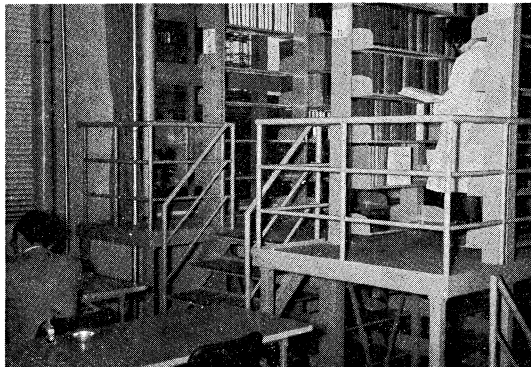
文学部の野上素一教授の御斡旋により、東京世田谷の医師であった故高橋毅一郎氏の愛蔵されていた詩聖ダンテ関係集書96冊が本館に寄贈された。

この集書の内容は、主として Divina Commedia の伊文原典と、その英訳、独訳、邦訳および欧米と本邦におけるダンテの研究書で、いずれも19世紀末から今世紀前期にかけての出版物である。

本館がダンテ関係書の寄贈を受けたのは、昭和14年に、故大賀寿吉氏から、世界的にも有名な旭江文庫(2,617冊)を頂いて以来、絶えてなかったことだけに、快よく寄贈して下さいました毅一郎氏の嗣子浩一郎氏の御好意を感謝するものである。



ウイルス研究所図書室



ウイルス研究所では去年の3月、附属病院の西部構内に、かねてから念願していた新館が竣工しました。これにより研究部門が一ヶ所に統合され、各方面からの期待を集めて、日夜ウイルス学の研究が続けられています。

図書室はこの新館の西隅の1、2階にあり、6月1日から開室になりました。3層式の積層書架は延72平方メートルあり、第3層には雑誌のバックナンバーが約1,000冊、第2層には単行本と故天野重安教授の蔵書、第1層には未整理図書が排架されており、すべてオープンになっています。収蔵容量は12,000冊ですので、ゆたかりとしています。2階の閲覧室は24平方メートルで、38種の新着雑誌が排架されています。

職員が1名で整理事務に追われているため、閲覧室には職員はほとんどいませんが、1冊の欠本もなく無事故です。職員が休暇をとると閉室になるのは、何んとしても不便ですが、夏には閲覧室に冷房をはいり、順次よくなっていくことと思います。近年とみに進展し、脚光をあびてきたウイルス学の発展にそって、図書室新設の運びとなりましたが、限られた予算内で運営するのは、なかなか困難なことです。一研究所内でのやりくりでは限界があります。少ない文献をより効果的に、より迅速に、少しでも利用者の要求に答えられるようにやっていきたいものです。そのためには、医学図書館をはじめ、結核研究所、他学部、他大学図書館との横の連絡を如何に密にしていかが、今後の発展にとって大きな問題だと思われます。

あ と が き

公共図書館では、図書館の本を読まないで、自分の本とノートを持ってきて、図書館の机だけを利用する「不図者」の問題がよく議論されている。本館でも同じことがいえるらしい。かつて本館で調べたところ、本館の図書の利用者の13倍もの諸君が閲覧室で勉強していたという記録がある。大学図書館が、学生諸君の勉強部屋となることは公共図書館とちがって、むしろ当然なことかもしれないが、しかし、大学図書館も、もっと豊富な予算をもち、講義に密着した本や、読まれる本を沢山そなえるべきであるし、学生諸君の間でも、そのことがもっと議論され、声となってあらわれてきてほしいのではなかろうか。

京都大学附属図書館報「静情」Vol. 4, No. 5 (通巻20号) 1968年1月15日発行・編集発行人：
岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表77-8111 (内線) 2220-2238